

ドッグホーム協会代表の  
白井睦子さん



もし自分に何かあったら、誰が犬の世話をするのだろうか……？犬を飼う人のなかでもとくに高齢者にとって、こうした問題はかなり切実です。実際、病気による入院や高齢を理由に施設に入る際には、それまで飼っていた愛犬と別れなければならぬケースが多いのだそうです。愛犬と別れたくないばかりに、体の具合が悪くても治療を受けなかったり、体力の限界を超えても自宅で生活しようと

もしものときの愛犬の世話、  
高齢の飼い主さんには  
切実な問題



元の飼い主さんとの面会に老人ホームを訪問

# 犬のために何ができるのだろうか

第19回：日本ドッグホーム協会

無理をする高齢者も少なくないといえます。そんな高齢者の飼い犬たちを引き取り、世話をしているのが、ここ静岡県静岡市内の日本ドッグホーム協会です。「静岡県内はもちろん、京都や群馬などの遠方からやってくる犬もいます。犬種もさまざまですが、やはり中型から大型犬が多いですね」と話すのは代表者の白井睦子さん。現在世話をしている犬は40数頭。ほかに猫やウサギなどもいます。2〜3才の比較的若い犬は引き取り手が見つかることもあります。高齢者が飼っていたこともあって、やってくるのはほとんどが高齢

愛犬を一生世話することは、飼い主さんとして当たり前のこと。しかし、なかには病気や高齢のために、やむを得ず愛犬を手放さなければならないケースもあります。新しい飼い主さんが見つからない場合は、行政施設で処分される運命に。日本ドッグホーム協会では、行き場をなくした犬たちを引き取り、世話をする活動を続けています。そんな日本で唯一の取り組みについてレポートします。

取材・文／片野ゆか 撮影／後藤さくら

の犬。引き取り手を探すことが困難なこうした犬たちは、基本的にこの場所ですつと暮らしていくこととなります。

## ある老夫婦の残した3頭の犬が設立のきっかけ

白井さんが「日本ドッグホーム協会」の活動を始めたのは平成13年12月のこと。経営していたペットの美容室とホテルの利用户客だった、ゴールデン・レトリバーをはじめ3頭の大型犬を飼う高齢のご夫婦と出会いました。

「ご主人が亡くなってから、病気がちで体力がない奥様に代わって犬たちの世話をするペット



協会設立のきっかけになったゴールデン・レトリバーのチエリー



預かる犬は定期的にシャンプー、トリミングをしています



保護施設は今年の1月まで経営していたペットの美容室とホテルに隣接



小型犬もいますが預かる犬の多くは中〜大型犬。掃除の行き届いたケージで過ごす犬たち

シッターとしてご自宅に通っていました。そのうち奥様も入院を経て亡くなられ、3頭の犬たちだけが残されたのです（白井さん）

生前、飼い主さんから「あの犬たちを頼みます」と何度も言われていたという白井さん。世話をして愛着がある犬だったこともあり、自分で引き取る決心をしました。その後、同じような事情の飼い主さんから引き取った犬が10頭ほどに増えました。それだけ需要が多いのなら、と正式に協会を設立したのだそうです。

それ以来、ペットサロンと協会の仕事を並行して行っていました。平成17年1月末からは日本ドッグホーム協会の活動に集中することにしました。

「始まったばかりのこうした活動の内容を完全に理解してくださる方は、世間ではまだ少数です。なかには大規模なペットホテルを運営していると思う方も……。そうした誤解を少しでも減らして多くの方の協力を得るためにも、思いきってサロンの仕事は終了することにしました」

### 愛犬の写真が元飼い主さんの心を癒す

現在、協会の施設は元ペットサロンに隣接する建物のほか、協会から車で20分ほどのところにある三保の2カ所。運営費は活動に賛同する賛助会員からの会費をあてています。しかし、

それだけでは充分とはいえず、三保に建てられた犬舎は寄付された廃材を利用してしている状態です。犬たちの朝晩の散歩、食事の世話、犬舎の掃除やシャンプーなどは白井さんとボランティアアスタツフによって行われています。

犬たちの世話だけでなく、元の飼い主さんとのコミュニケーションも重要な活動のひとつ。白井さんは、協会で暮らす犬たちの写真をハガキやカレンダーなどに加工して、定期的に発送しています。

「うちに来る犬の飼い主さんのなかには、最後まで世話ができなかったことで自分を責めている方もいらつしやいます。元愛犬の様子を見て、その気持ちが少しでもやわらげばと思って送らせていただいています」

東京都在住の船津雄三さん（80才）は、平成15年3月に15才になる柴犬のチコを協会に預けました。船津さんがガンを患い、奇跡的に症状は安定したものの体力的に激しい衰えを感じていたとき、チコに痴呆の症状が現れました。夜鳴きや徘徊が続き、最後はトイレも意のままにならない状態に。自分の体力ではきちんとした介護ができないし、犬の飼えるマンションとはいえず近隣へも迷惑がかかる……。悩んでいた船津さんは、知人を介して日本ドッグホーム協会のことを知りました。「状況を相談すると親身になっ



様態が急変するおそれのある犬は、事務所にいちばん近い場所で様子を見ます



松林近くの新・保護施設。寄付された廃材を利用して建てられています

愛犬が元気に暮らして  
いるという事実が  
元飼い主の生きる活力に



エスに会いたい。  
飼い主さんの強い希望があれば、面会する機会をつくることも。この日白井さんは、1時間半かけて元の飼い主さんがいる老人ホームを訪ねました。

1カ月半ぶりの対面

視力を失った後藤さん。  
しっかりとエスを抱きしめます



再会を見守る

犬と紡いできた絆の  
強さが伝わる時間です



エスのつける鈴

音で自分の犬だとわかるよう  
に後藤さんがつけた鈴



30分の面会を終えて  
クルマに乗った愛犬にお別れを言う後藤さん。見守るほうもつらい瞬間です

**3時間の道のり**  
**面会のために犬と行く**  
元飼い主さんの状況や思いは  
て対応していただき、これなら  
大切なチコを任せられると思  
いました。同年11月に亡くなるま  
での8カ月で、何度か面会にも  
行きました。協会で世話をし  
ていただいたおかげで、チコも私  
も安心して暮らすことができま  
した」と船津さんは話します。

さまざま。白井さんは、可能な  
限りそれぞれの事情に合わせた  
対応をしたいと話します。自分  
で移動することができない元飼  
い主さんが強く望む場合には、  
犬を連れて面会に出かけること  
もあるといいます。  
この日の白井さんは浜松市内  
にある老人ホームを訪問する予  
定。クルマに乗せられたのは8  
才になるミックスのエス。元飼  
い主の後藤まつさん（83才）は、  
平成17年1月までひとり暮らし  
をしていましたが、視力を完全  
に失ったことをきっかけに老人  
専門の施設に入ることになりま  
した。後藤さんにとって、唯一  
気がかりだったのはエスのこと。

引き取り手が決まらず、一時は  
「自分だけがいないところで暮らす  
ことなんてできない」と施設入  
り取りやめも考えました。そう  
したなか、知り合いを通じて白  
井さんの活動を知った後藤さん。  
エスがドッグホーム協会へ預け  
られることが決まったのは、行  
政施設に持ち込まれる前日のこ  
とでした。  
協会のある静岡市内から浜松  
市まで片道約1時間半。施設の  
玄関口で、後藤さんとエスは1  
カ月半ぶりに対面しました。目  
の見えない後藤さんは、両手で  
かかえるようにエスの首を抱き  
寄せます。エスもまた、安心し  
きったように後藤さんの腕に体



「将来の夢は、お年寄りがベットに会いに来られる施設をつくることです」

(写真右) 入院と自宅療養を経て、約1年ぶりに愛犬のゴローと暮らし始めた稲葉さん

(写真左) 一度協会に預けられたアメリカン・コッカー・スパニエルのカレン(3才)を引き取った佐野薫さん



**不幸な犬をなくすことと  
高齢者が豊かに暮らすことは  
絶対に切り離せない問題**

を預けてじっとしています。

「この活動をやっていて本当によかったと思う瞬間です」

そう語る白井さんの目には、

少しだけ光るものがありました。

**もう一度、いっしょに暮らしたい!**

この協会が世話をする多くの犬は、残りの一生をここで過ごします。しかし、なかには再び飼い主さんのもとに戻る犬もいます。稲葉佳子さんは約1年前、13才になるミックスのゴローを協会に託しました。強いストレスが原因で起こる不眠や拒食の治療のために入院を余儀なくされたのです。

「約3カ月にわたる入院生活のあと、自宅療養の日々でいつもゴローのことを考えていました。もう一度いっしょに暮らしたいという目標があったからこそ、約1年でここまで回復することができたのだと思います」

協会の存在があったので愛犬の心配をせずに治療に専念することができた、と稲葉さんは言います。約1年ぶりにゴローと暮らしてみても、以前よりも少し聞き分けがよくなったみたい。これからはしつけのことも真剣に考えたいと思います」と、新

しい目標もできているようです。

**いつでも愛犬に会える  
複合施設をつくるのが夢**

協会にやってくる犬のなかには、飼い主と離れた不安から攻撃的になったり、食事を拒否する犬も珍しくありません。

「生傷は絶えないし、フードを食べないときは我慢比べのような感じですね。預ったからには基本的に「ウチの犬」という感覚で接します。吠えているときも、何を要求しているのかなと考えます」

そんな態度に、犬たちも1週間ほどで心を開くのだとか。

白井さんの目標は、この活動を全国規模で展開させること。

「最終的な夢は、愛犬を預けた高齢者がいつでも自分の犬に会いに来られる複合的な施設をつくることです。不幸な犬をなくすこと、そして飼い主さんが残りの人生を豊かに送ることは、絶対に切り離せない問題だと思っています」と語る白井さん。人の社会が高齢化していくにつれ、犬の平均寿命も年々延びています。白井さんが取り組む課題は、じつは多くの人にとって「思ったより身近なこと」ではないでしょうか。



預けられる犬の多くは、すでに高齢。ほとんどの犬がずっと施設で暮らしていくことになります

**問い合わせ先**

おもな活動は、さまざまな事情で犬が飼えなくなった高齢者から犬を預かること。今年で設立4年目を迎えました。

動物愛護団体 日本ドッグホーム協会  
静岡県静岡市清水区大坪2-6-18  
☎0543・44・1540  
<http://www.doghome.jp>